

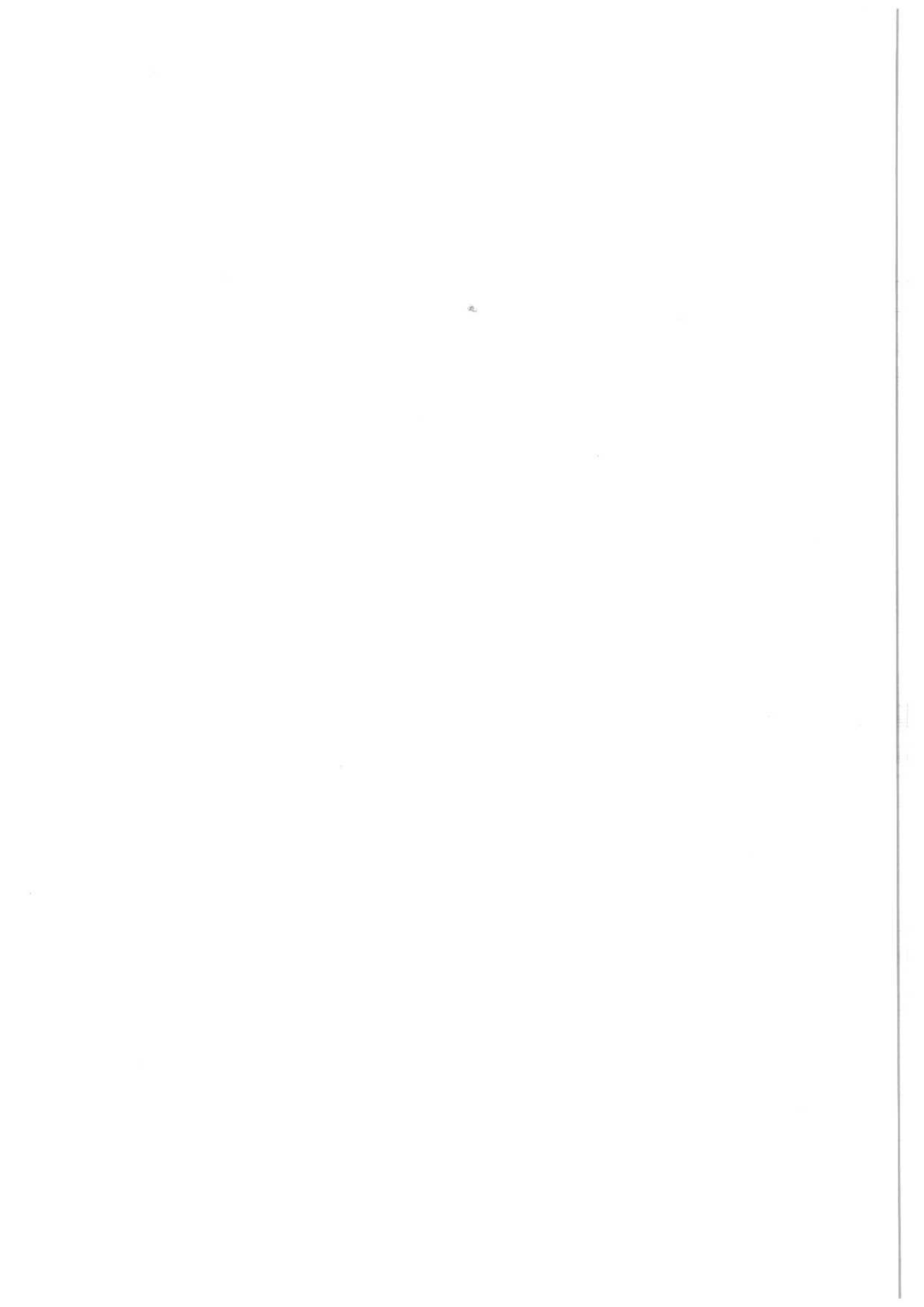
---

第5章

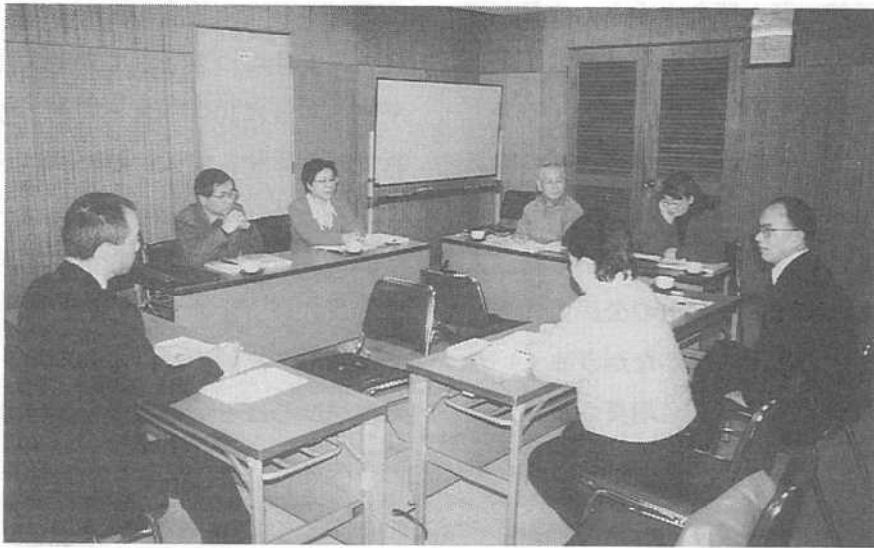
そして未来へ

～生涯学習時代の公民館

---



## 1. 座談会 —公民館の20年とこれからの思う—



日 時 1月29日(木) 午後7時～9時 場 所 福生市教育委員会 会議室

出席者 (50音順敬称略)

秋山 典子 (七味とうがらし)

奥田 康弘 (元公民館運営審議会委員)

川辺 進 (公民館運営審議会委員長)

佐々木淑子 (コール野ばら)

田中 加代 (公民館本館利用者連絡会委員長)

鳥居 由幸 (福生市音楽愛好者連絡会会長・公民館運営審議会委員)

司 会 村田 孝明 (公民館長)

司会 皆さんこんばんは。本日は大変お忙しい中をお集まりいただきまして誠にありがとうございます。福生市公民館も早いもので開館20年が経過致しました。20周年にあたり、これからの公民館をみなさんと作っていくにはどのようにしていったらよいのか、そのきっかけとなるような座談会ができれば嬉しいと思っております。

とりあえず、私の方からきっかけとして、この10年の簡単な流れのお話をさせていただきます。昭和62年から平成9年までの10年ですが、公民館が出来て最初の10年は立派な建物が建ち利用者も新しい建物に期待をして大勢集まってこられて活気に満ちた公民館ではなかったかという気がしております。昭和62年からの10年は、景気が良かったこともあって、カルチャーセンターというもの

が社会教育に取って代わる勢いになった時がございました。そういうところに通うということが一つのステイタスで公民館の講座などは遅れている、野暮ったいなどという感があった時代ではなかったかなと考えます。ところが、その上向き加減の経済が破綻をして、浮足立っていた世間が地道になり、改めて公民館の中で様々なことを学んだり、趣味を見つけていくということが少し見直されてきたのではないかという気がしております。ただ、見直しをしようと市民の動きが出てきた時に、国のいう生涯学習計画が出てきて、公民館が今まで一生懸命頑張ってきた事を横取りをされてしまうような感じも致しております。

また時代の流れとして、この10年というのはバブルがはじけてから行政改革という声に押され、

直接的には福生市では話には出てきておりませんが、三多摩の公民館の話をお聞きすると、人員削減ですとか、絶対的な予算の削減等で、非常に厳しい状況にあるという話も伺います。

福生の場合は、平成6年に公民館事業系の職員が2名増員致しております。これで、松林分館・白梅分館の職員2名が3名体制になりました。人員的な配置としましては、福生市の公民館は恵まれていると思います。ただ、なかなかうまくいかないもので、事業系の人員が2名増員されたわけですが、平成7年からベテラン職員の移動が大分ありました。

予算の中から公民館予算を見ますと一般会計は62年度では127億7千万、平成9年度が219億3千万です。公民館費は昭和62年度は1875万円、平成9年度は3157万円と増えております。事業を行うにあたって講師の先生方をお招きする時の謝礼を比較しますと昭和62年度は、788万円、平成8年度は1225万円となっております。簡単な比較ではございますが、一般会計と比例して、公民館費や講師謝礼はなかなかの伸びといえます。

事業の中身はどうかと言いますと、幼児・少年・青年・婦人女性・成人一般・高齢者という形で分類してみますと、昭和58年度に現在の保育室事業、子ど



もたちの託児だけではない、お母さんたちが様々な勉強をし、子どもたちと共に育つという幼児と母親を対象とした保育室事業が出来ました。昭和62年度では7コース実施、平成8年度には3コースに減少しています。少年につきましては、62年度は10コース、平成8年度は9コースということではほぼ今までと同じような形で行われています。大きな変化がございますのは青年事業です。昭和52年度は5コース、62年度には3コース、現在は

1コースというようになっております。福生市の公民館から青年活動が薄らいでいております。婦人・女性につきましては昭和62年度は12コース、平成8年度は10コースと同じようなペースで行われております。成人一般につきましては、52年度は23コース、昭和62年度は21コース、平成8年度は33コースと、これは職員が2名増えたということもございまして、一般の事業が増えております。特に、高齢化社会に向けて、平成元年から、寿市民ひろばというような形で高齢者向けの事業が開始されました。平成2年から寿市民実行委員会が設定され、平成3年には本館だけではなく、松林分館・白梅分館の3館で実施されるようになりました結果、昭和62年度では高齢者の事業は4コースということでしたが、平成8年度には7コース実施しております。

また、公民館の62年度からの10年ですが、特に大きく変わったことと致しましては第九の事業です。これは、市民会館の方でオーケストラを準備しましょう。ただし、合唱団の方については、市民参加型ということで、公民館で団を作って合唱指導し、市民会館の主催事業の方に参加をするというような形が平成2年度にできました。平成3年(平成2年度)3月末に第1回の第九を行った経過がございます。また、平成5年度には、東京都の「TAMAらいふ21」事業で歴史ミュージカル「玉の都」、市民オペラ「カルメン」を福生で行いました。

それから、女性行動計画ができました関係でふっさ女性フォーラムという講演会を公民館としましては、今までにない大きな予算で、イベント型の事業を行うようになりました。

以上簡単にこの10年をご説明させていただきましたので、今日ご出席の皆さんは様々な立場で公民館に関わっておいででございますのでそのご経験と今話題の生涯学習のこと、また、地方分権推進委員会の第2次勧告の話などを踏まえまして、

これからの公民館のあり方というようなことをお話いただければと思っております。よろしくお願ひします。

秋山 最初の10年というのはやはり、上り坂でずーっと来ていて、その後の10年というのは、上り坂から少し下降気味というような感じで、それが、バブルでお金中心の時代で本当に「公民館なんかいらぬ」というような勘違いをしていくような傾向がありました。経済が破綻したことにより、やっともう一回公的に保障された社会教育が



見直されるのではないかと、いうところでまた、生涯学習、各自治体の行政改革という中で、何だか先細りの感じがあります。今度出ました第2次勧告もそうで

す。しかし、それでいいというようには思っておりません。この間、今度の学習会のチラシを作っています、「どうなる公民館」といった後に、どうでもいいととられたら困るよね、「がんばれ公民館」とつけたらどうかと話しました。どこかで、希望的というような事があります。ただ、社会全体でも福生の公民館でも、どこを突破口にして元気になるのか、その辺りが私にも良くわかりません。

司会 他の市町村と比較すると、その辺りはどうでしょうか。客観的に福生をみまして。

奥田 他と比較してといわれましても難しいのですが、私としましてはそんなにしょぼくれているとは感じておりません。むしろ、かなりがんばっているという印象を持っております。まず第一に、平成6年10月の職員2名増員ということは目が覚めるような事です。それは、えっ、この時代に、とおもうくらいに大切なことです。それから、去年の大ホールでのミュージカルは、とても素晴らしかったと思います。手作りでしょう。

あれを見ていて凄いなと思いました。これはやはり、第九から始まり、その第九を市民合唱団でやったということが大変な事であった。

鳥居 大体6万人の市で一つにまとまってあれだけのものをやるのは大変なことであり、他の市ではなかなかできないようですね。歴史的な背景というのが色々ありますが。

奥田 その辺を私は、説明していただければと思いますが。私たちが知らない歴史的な背景などを。私も合唱なんか一度もやったことがないのに、あの第九に参加をして、燃えましたよね。あれが引き金になって、2年に1回は公費を出していただいて、合唱を続けていってミュージカルにつながっているのですよね。その事がプロの手助けがあったにしろ、題材は福生の地域の話でしょう。ああいうことがやれたというのは、凄いなと思います。

鳥居 今、奥田先生がいわれたように公民館があったからできた。これは本当ですね。先程、秋山さんが、最初の10年に比べると、その後の10年は下り坂ではないかと感じたということですが、後の10年も盛んになってきているところとそうではない部分と両方あると思うんですね。だいぶ前ですが昭和50年頃ですか、公民館が始まった頃からコーラスグループが集まって音連（福生市音楽愛好者連絡会）という形で一緒に活動していて、市政20周年で、何かやろうではないかという時に、第九をやろうかということが音連の方にきて、そこで色々検討して実現したわけです。その前、公民館のつどいで“私たちの街に音楽を”という分科会があり、そこで「福生でも第九がやれたらいいね」という事ができたわけです。公民館におけるコーラスの活動と公民館のつどいの分科会での皆の意見が盛り上がって、皆にそういう気持ちがあつたからこそ、そういう企画ができた時に皆でやってみようかということになったわけです。

奥田 この前の10周年の座談会で市民コーラスの降幡智子さんが「小ホールができてるんだから使ってよ」と職員からいわれて、「一団体ではつかえませんよ」という話をしたら、職員が色々な団体をくっつけて第1回のコーラスを全体でやられたことにより、それぞれのグループがもっと大きくなっていったという経過を話していますが、それなんかも、やはり公民館があったからこそですよ。

佐々木 昭和56年に第1回の市民音楽祭がスタートしたのですが、きっかけは今までの各グループが、それぞれ発表する市民文化祭とは別に、みんなで一つの物を作り上げる音楽祭にしたいという意見が出てきたことからでした。これが現在まで続いている6月の市民音楽祭なのですけれど。そして公民館事業の“ふっさ第九演奏会”を経験したこともおおいに影響して、自分たちでもっとすばらしい音楽祭を作っていこうと、月に1回から2回ある、音楽愛好者連絡会の会合での意見交換は、以前よりとても活発になったように思います。第九に触発されたというか、それから是非毎年ではないにしても何か大きな物をやりたいなということでこの間やったミュージカルなんかもそうですね。

鳥居 音楽だけではなくて、バックアップに劇団バックカスに協力してもらおうとか、元の影絵のサークルのななよんのメンバーに影絵をやってもらったりと、公民館で活動しているグループ皆が協力して市民創作の合唱組曲「虹の村」ができたわけです。そういう意味では、市民的に向けて活発に動いているのは音楽関係ではないかなと私は思います。

奥田 福生の公民館は市民会館と併設ですよ。僕はできたころ併設に反対だったんですね。市民

会館と併設ではろくなことはないという、多くの場合そんなもんですから。どうしても市民会館が中心になって公民館的なところが飲み込まれてしまうんですね。しかし福生は、公民館の職員がしっかりしていたものですから、ホールを活用しちゃったんですね。だから、第九などもできるし、創作ミュージカル“虹の村”などもできたわけです。あれはやはり、併設だからできたということもいえるんですよ。

鳥居 今、そう外からいわれるまで気が付かなかったところなんですけど、僕は長年活動していて当たり前だと思ってるんですけども、第九にしても何にしてもいろんな周りの市の人から「福生でやっているから行こうよ」という人達の話の聞くと、福生というのは非常に恵まれていて、活動が活発だということをよくいわれます。「福生はいいですね」と。

奥田 例えば、建物からいうと大きなホールがあるわけですよ。公民館部分の事務室だって、場合によってはホールの事務室になりかねませんよね。けども、あそこをホールの事務室と感じる福生の市民はあまりいませんよね。あそこはもう、公民館の事務室という感じがありますよね。

鳥居 そのへんは、僕は違いますよね。あそこに来ている、公民館を活用している人はそうかもしれませんが、それ以外の人は市民会館の事務所だと感じると思います。

奥田 私の身びいきなんですかね。でも、公民館の活動がしっかりしていなかったら、あのホールを使い切れなかったですよ。

鳥居 そういう点では僕らの音楽活動は非常に恵まれているというのは感じます。いれものとしてもそうですし、活動としても色々援助してもらったり、予算的な面もそうですし、それ以外にも企画の面でもそういったところでも色々恵まれていますね。

奥田 やはり、イベント主義になってしまうん



ですよね、大ホールと併設の公民館というのは。イベントをやっている市民の人は活発にやっていると、公民館の活動をやらなくてもあまり文句を言われたいという感じが他の所ではあったんです。ですから、ホールとの併設は僕は反対だったんです。でも、福生にしても、昭島にしても防衛庁から予算を取るためにはホールにしなければ予算は取れないという話を聞いてしょうがないかなんていっていたんです。

もう一つは、今もあるんでしょうが、ホール借上援助というのがありますよね。一番最初の市民音楽祭なんかもそれでしょう。その制度も、凄く大事な制度だと思います。毎年大ホールを使う音楽団体をお金を出して借りていたら大変ですよ。借上制度というのを工夫された人に敬意を表すし、そういう制度がずっとあるということは大事なことですよね。

佐々木 「ああいう広い所で歌えていいわね」なんていわれたことがありました。そういう意味で私たちは早くから制度を使えてよかったです。

秋山 奥田先生からみると福生の場合は、ホール併設でも非常に上手くイベント主義に陥らず上手く使われているというふうに。

奥田 そうなっているんじゃないでしょうか。

秋山 その辺は職員がかなり意識して関わっていただければいいですね。偶然そうなっているのではなく。例えば、ホールの借上げというのも制度としてはとてもいいことだと思うんですよ。市民が一つのホールを借りるということは、小額のお金ではやはりできないことですから。ただ、それを恩恵としてではなく、市民がどれぐらいその制度を承知した上でそれを使っているかということが、私はまだ問題かなと思うんです。課題だなと。そういうものを大事にしたいんであればやはり、市民がその制度について、なぜそういう制度があり、どこで保障されているのか、自分達にとってどれ

だけ大事なもののなのかというのをもう少しきちんと自分達の活動の中でも位置付けて行く。そういうものでないと、行政改革の波の中で削られていってしまう可能性が凄くあるんじゃないかなと思う。その辺は、かなり職員にも意識的に取り組んでもらわなければならないし、市民の方も単に恩恵としてではなく、保障の意味を認識する事が今後ますます必要ではないか。

奥田 いつのまにかなくなる危険性はいつもありますから。

秋山 だからそこはかなり意識しなければいけないですよ。

川辺 話を少し戻しますけど、先程、秋山さんがおっしゃった事の一つなんですけど、私は、青少年を通じてそのお母さん方、それから小さい子をお持ちのお母さん方と交わりがかなりあるんですが、以前と違って自分で問題意識を持って勉強しようという人が非常に少なくなっている。呼び掛けても「私たちはそこまでやらなくても」というような言葉が帰ってくる。若い子たちもそうです。以前ですと、ちょっと誘えば公民館に遊びにきてくれることはあったけれど、このごろは前でたむろしていてもいくら誘ってもホールのなかに入らないという傾向が随分ありますよね。社会的にも勉強嫌いが親にも子どもにもかなり増えてきている。そういう時代なんで逆にとると、だからこそ勉強していかなければならないということが出てくるのではないかなと思って、私は「勉強しましょうよ」と呼びかけるんですが、今のところはなかなか成果が上がらない。そういうところが、秋山さんがおっしゃった大きな面を意識する、考えることが出来ているかが出来ないというか、しないというか、目に付く部分なんではないかなと思う。

鳥居 私の感じなんですけど、玄関から入っていったら集会室にいきますよね。ロビー辺りにきている人が前に比べて少ないんです。ロビーにき

ている人というのは単に、ロビーを利用するためにそこにきているのではなくて、色々な活動をしにきている人達が少ないというか。

秋山 集うというか、群れるというか。

鳥居 そういう意味で少ないというか、自分の目的のところへスッと行って、スッと帰る。

川辺 今は公民館が工事中なので福祉会館の2階のシルバー人材センターの事務所の前にロビーがあるわけですが、シルバーのロビーの机の配置は使いやすいらしくて、公民館を利用された方が度々そこへ来て話し合いをしてるんですね。本館の方のロビーはああいふ形になっていない、ロビーで自由に話をできるスペースを公民館に必要ではないかなと思うんです。福祉会館の方のロビーはいたずらもされますがよく使われるんです。

奥田 そこは一つホールとの併設の弊害でしょうね。ロビーというよりは避難場所なんですよ、あれは。1200人を収容するホールには必ず、エントランスというものを置かなくてはいけなくて、そこにソファなどを置くわけにはいかないんでしょうね。消防から文句をいわれるんじゃないですかね。

司会 いまあるロビーの所は大ホールの入り口なんですね。だから椅子もいくつもおけないわけで、皆さんが集まりにくい雰囲気になっている訳です。

川辺 集まって自由に話せる場というのは、必要なんではないかと思うんです。そうすれば、使い方も違って来るだろうし、公民館に入ってくる人も違って来る。そういうメリットがないかな。

田中 私が2歳・3歳児を育てていた頃は何しろ人と話す場が欲しい、仲間が欲しいという飢えたような状況があって、それでどこでもいいから群れられればいい所を必死で探していました。だから、講座でもあれば、飛びつくというのがあったと思うんです。講座の内容はどうでもいいから、とにかく背中や胸にくっついてる子ども

を離して、人と話がしたいとか、自分だけの時間を保障されたいというのがあったと思うんです。今は幼児を抱えている若いお母さんと保育室という所で私は仕事としてかかわっていますが、そういう要求が少なくなっていると思うんですよね。

奥田 要求が少なくなってるんですかね。

田中 それは、要求というかそれが一概に今の教育制度の問題とかいいたくありませんけれど、まず学習とか勉強とか講座に対しては昔より今の人の方が手慣れてますよね。発言するのも書くのも上手、ちょっと記録まとめて下さいといえどんどんできるし、レポートといえばハイハイといつて、それこそ、そういう事にはたけているし、ワープロも慣れているし、では何が問題なんなんだという、人と接するのがとても苦手というか、今の教育の影響とか強くあると思うんです。昔も人とかかわるのは苦手で引っ込み思案だという人もたくさんいたんですが、今は苦手で引っ込み思案というのではなくて、どちらかというと希望してあまり接したくない。だから、講座参加の目的というのが、学習のみの目的になりがち。でも当時の私たちは、学習は何だって構わない。とにかく、人と会いたい、しゃべりたいというのが目的だった。今は、学習目的というのがまずあって、人とはなるべくほどほどでいいわという、そこがとても強く現れていると思うんです。

秋山 今話されたのは、ここ4、5年の人達の傾向よね。

田中 7、8年前までは幼児を抱えたお母さん



たちが、公園デビューという名前でもってドラマにもなり、色々話題に取り上げられましたよね。今は、あまり公園デビューという言葉が聞かなくなったな—と思ったら、もうデビューはしたくないって



言う。なるべく人のいない時間や人のいない公園を狙っていくんだという。では、公園の目的は何だろうって思ってしまうけど、何でもいから人恋しいから公園へ行くという時代ではないなと感じます。もう一つ感じるのは、勉強ということが私たちの頃はできなくてもいい、できてもいい事でした。勉強以外のことで何か人より出来れば、すごい英雄にも慣れたり、かけっこができれば王様だったりとか、ひとつ秀でていれば主役になれたんですけど、今は平均化したというか。皆が一生懸命勉強するようになって、皆が賢くなってそのかわり、大学を卒業する頃には学習や勉強に飽きちゃってしまうのではないのでしょうか。目から、うろこが落ちるような、えーってというような学問はもうないみたいな感じがしますよね。講座にどれを持ってきても。では、何なのかというと生活の知恵、おむつのあて方とか、日光浴を乳児にはさせなくてはいけないとか、本当の生活の知恵というものが力としてうせている。だから、幼児が大人と同じ生活リズムをしていても疑問も何もない。先程、川辺さんの勉強嫌いな母子、青少年もという話がでていたけれど、学習というのが、知識を詰め込むだけではないよという、学習そのものの転換が必要ですね。

秋山 ヤッターというような、楽しいとか、充実感とかそういう経験をしてないんだと思うよ。やらせられた学習の方が多くて、皆同じようにやってきて、発想力も乏しく、イマジネーションもあまりないからじゃない。

田中 第九の合唱なんかも今の子どもたちの方がリズム感もいいし、もっと大勢参加すればいいのと思うけれども、若い世代の参加が少ないですよ。

鳥居 少ないですね。

田中 ちょっと髪が白くなった方々が、凄く元気一杯で、私は20代の方や小さいお子さんたちが「やってみたい」と参加するものいいなと思うけ

れど、元気一杯なのは中高年にちょっと入ったかなあという方たちばかりですよ。そこがとても残念というか。

秋山 皆、大体大学出る頃には疲れ切っているんじゃない。人生終わっているというか、本当に自ら学ぶことの楽しさとか、自分が求めて何かするみたいのが無い。

田中 鳥居さんや佐々木さんはやっていて手応えがあるとか、歌って嬉しいとかそれが公民館の学習だっておっしゃってたけど、そういう手応えのあるものというのが必要なんではないかなと思う。

鳥居 例えば、大ホールを使って2時間の舞台をやるでしょ。そのためにはやはり半年から1年の準備期間というのがいるんですよ。積み重ねというのは、非常に苦しくなる。涙した人もいます。そういう所を乗り越えて最後の2時間の凝縮されたステージがあって終わってよかったという、その感激を味わうまでのステップが、かなりの苦しさを乗り越えなければ味わえない。そういう苦勞をしてまでもやるのがいやだよという。

佐々木 それっていうのは、山登りのようなもの、見晴らしが開けたときのあの感動はやはり登った人でないとわからないという。でも私はどちらかという、その事よりももっと、公民館に出入りしているうちにいろんな人に出会えるすばらしさです。子どもクッキングクラブの高橋登志江さんとか、公民館主催講座からできた自主グループとか。考えてみると、1週間に4回も通うことになって、勤めのようになっているんです。本当によかったと思います。

秋山 先程鳥居さんが例えば第九の時にそのプロセスに乗り越えなくてはならないことがあり、みんなで作り上げていくということを公民館で一番大事にしなければならぬ話されましたが、乗り越えるという意味でいえば、どんな講座においても参加者がそういう所を乗り越えなくてはいい

ないし、私は職員に対してもそれをすごく望むんです。一つの講座を主催する時に職員がそういう思いで講座の企画から講座の終了まできちっとレポート提出がされるまで、例えばレポートが必要な講座の場合であればですけど、そこまできちんと職員がそのプロセスを大事にしていけないと公民館でやっている講座の意味が何もなくなってしまおうと思うんですね。これからの公民館をやはり豊かなものにしていくんだとしたら、その辺を意識して大事にしていけないと公民館らしいものが無くなっていく。カルチャーセンターだったら別にそんな事を要求する必要はないかもしれないけれども、公民館でやるからこそ、それを大事にしながらさらに人と人の繋がりができていく事を、今はかなり意識的に職員なり気が付いた市民がやらないと、先程田中さんがいったように人と関わるのを拒絶する様な人が増えてきているのだから。

佐々木 事業係と管理係の方が別の机になって  
いますよね。管理の方が手前で、事業の方が奥  
(の方の席で)、そうすると事業の方とお話した



いときはちょっと遠い  
ですよ。そういうと  
きに、つい声がかけれ  
ない。一緒に何か  
やっているっていう意  
識をやはり職員の方  
にも持っていてほしいな

と思うんです。例えば、貸し出しのことで大変  
でしょうけれども利用者が申請に来るときに、書類  
だけ渡すのではなくてちょっとした助言とかして  
くれば、この曜日にはこのサークルが使ってい  
るとか、このサークルだったら私たちもそのサー  
クルに入れるかもしれないと、そういう繋りもで  
てきますよね。また、職員の方もたまには私たち  
のサークルがどんな様子か覗いてほしいと思うん  
です。そうしないと、色々な悩みがある時にきや  
すく話せない。そして、もっと職員の人と利用者

が仲良くなれたらと思います。公民館と利用者が  
貸し借りの関係でなく、公民館での活動がどんな  
意味を持つのか、大事なのかもっと理解されて行  
くのではないのでしょうか。会員の人は会の代表で  
もしなければ全くわからない、お任せになっている  
んですから、サークルが活動しているときに気  
楽に顔を出してくだされば交流ができるのではな  
いかと思うんです。

秋山 いまおっしゃったような繋りを普段から  
作ってれば、単なる貸し会館に陥らない一つ  
の方法でもありますよね。職員の顔があって、  
使っている人の顔があってという繋りで単に会場  
だけ借りればいいのか職員なんかいなくてもいい  
とか、職員は職員で勝手に使いなさいみたいにな  
ってしまわない様に、市民の側、職員の側のお  
互いの努力があれば随分かわってくるのではない  
かな。

川辺 佐々木さんの話に関連して自分達が勉強  
したものをもう1回いかせるような例えば、絵手  
紙なんかだったら、福祉センターに持ち込んで福  
祉センターで絵手紙を書いて配食の人達にお弁当  
の中に入れて配るとか、前公運審の柳さんが、公  
民館と福祉は繋がらなくて駄目だとおっしゃっ  
たけど、そういう風にしてやはり自分達が勉強し  
た事を地域の中でいかされていくという事の中に、  
自分も入っていけば勉強嫌いの人もやる事によ  
って地域に役立つという事が出てくると思うん  
です。逆にいうと、講師なんかもかなり地域の中  
にいらっしゃるから、そういう人をやはりドンドン  
取り組んでいくというようなことで地域に密着す  
るといふ言葉が変だけれども、繋りのあるよう  
な勉強の仕方というのがあると思うんです。寿市  
民広場の初めの10年史なんかに書いたけれども、  
私は講師になったり、参加者になったりと両方兼  
ねてやりましたが、その中でやはり私が講師  
になったときには1回だけのものではなくずーと  
続いてやっていて、前にやった事を復習してまた

それを積み上げていくウズマキ方式、自分で考えたんですが、そしてだんだん広げていく、それが自分の家に帰ったらどういう風に役立ったか、などという事を話し合うという事をやっていったんですが、そうすれば「私には関係ないわ」というのではなく、やる気を起こす一つのきっかけにはなるのかなと思うんですよね。例え、学習のスタイルも時代にあわせてという大袈裟になるけれど、変えていかななくてはいけないと思うんだけど、どうだろう。

佐々木 それは凄くそうだと思いますね。公民館を知らない人達がまだいるんですよね。だから市役所の窓口でもね、受付するだけじゃなく、この町にはこういう所がありますという宣伝する。市民がどんな所なんだろう、覗いてみようと思いたくなるような公民館のPRができたらいいなと思う。

田中 いいなと思う事はクチコミで広がるんですよ。私が行ってよかったから、あの人を誘いたい。そうするとその人を信用して行ってみようかという気持ちになって、広がっていくということになりますよね。「よかったわ」という中身が単なる知識だけのことでなくて、繋る事がよかったとか、手応えがよかったという広がり方ないと、先程お話に出ていた第九の厳しいレッスンにもついていけません。長い期間の活動というのは人と人の心地良さができないです。若い人達は孤立しているのが大好きでそれしかないということでもないんです。ただ知らないんですね、人と繋るといふ事の心地良さを。中から外を見ていて良さそうならば扉を開くけど、危なそうなら蓋を締めようみたいなちょっと臆病な所がある。だから、こんなによかったんだというものさえあれば、やはり人と繋りたいという気持ちはあると思うんですよね。

佐々木 昔私たちが遊んだ頃は、小さい子も大きい子も縦の関係で遊びあいましたよね。兄弟で

小さい子がいれば、おんぶしてでも遊びましたよね。今は横の繋りしかない。

田中 育ちようが違いますよね。例えば、昔ならば、広場みたいのがどこにでもあって、そこにいけば誰かに会えるとか、ここにいなければ次だというのがありましたよね。どこかでは絶対誰かに会えて遊べるとか、今はアポイントメント取らないと小学校・幼稚園ぐらいから一緒に遊べないという状況がありますよね。

奥田 先程から、それと関連するのではないかなと思っている事が一つあるんですが、館長が対象別に昭和52年、62年、平成8年と並べてくださいましたよね。一番ショックだったのが、幼児のところなんかは、0、7、3コースでしょ。僕は0、7、14コースといわれるのかと思った。これは、なぜなんでしょうね。僕は、田中さんがおっしゃった通りに人と付き合うのが物凄く下手になっているんだと思う、今の若い子は。大学生なんかでも、お互いが人と付き合うのが下手ですよ。中学生も高校生も群れているようですが、凄く警戒しながら群れてますよね。相手の腹を探りながら、群れているだけ。表面的には群れているけれども、中味は仲間になっていないんですよ。それはやはり、人と人と付き合うことに慣れてないんだと思う。僕は定時制高校の教員を30年ほど前に6年やったんですが、どこで子どもが成長していくかという、2つあったんです。社会科の教員だったんですが、授業をやっている突然身をのりだして授業に聞き出す子がいるわけです。それは大抵組合の役員になるとなるんです。組合の職場委員をやり出すとそうなるんです。もう一つは、文化祭実行委員会とか、体育祭実行委員会、遠足実行委員会などそういう実行委員会をやる、力をつけるんです。

秋山 やはり、何かを一つにまとめていくことは第九のプロセスと同じですよ。

奥田 第九だとやはり、半年とか1年でしょう。

でも、文化祭実行委員会は学校の中では一番長いですけどやはり、3か月はかかります。遠足実行委員会であれば1か月から1か月半です。そういう風に短い期間でも一緒にやってよかったという感覚を積み重ねていって、その積み重ねで段々長い事に耐えられる。この先にいいことがあるというのが実感としてわかるんだと思う。今、学校というのはそういう事を全然やらせていないでしょう。だから、そういった事に慣れてない若者が今子どもを産む時期になっているわけですよ。それで、僕は幼児教育の所が大切だと思うのです。幼児の頃に集まれば幼児同士はよろこんで一緒に遊ぶと思うんですよ。そういう経験が今どこでやれるのだろう。公民館の保育室というのは、その格好の場所なんではないかなと思っているのです。

田中 幼児たちも群れる場所を作ってやらないと場がなくなってますよね。

秋山 だからやはり、私は公民館でやる保育室の意味というのを今、もう一回問い直してやっていく必要があるのではないかなと思う。公民館だからこそやれる事業というような位置付けを持って、やっていく。でも、奥田先生がおっしゃったように、カルチャーセンターではこんなことできませんよね。公民館もやはりユニークというか一番大事な部分を押さえて、これから未来を背負う一番大事な時期の子供たちにどう集団の中で暮らすか、子どもなりの喜びを感じさせていくか、そういう場として公民館をとらえて、“気持ちの問題”という単純なものではなく、そういう“位置付け”で取り組んでいくという事が大事になってきていると思います。

鳥居 去年の6月市民音楽祭で、“ミュージカルって楽しい”という企画をやったんです。あの時には、児童合唱団「フレンズ」が40数名が出た。それから高齢者の方のコーラスも出た。練習もかなりの回数あって、僕はその何回か、子供たちの

コーラスにも立ち会った。大人と一緒にやりますので。一番小さい子は小学校3年生。中学生、高校生も、数は少ないですが。そういう風に年齢の幅があれば、上の方の子たちは、下の子たちの面倒を見る。そういうところは非常にいいなと思う。ただ、横に群れるのではなくて、積極的に縦で群れるような仕掛けをつくっていく。今、学校や社会の中でなかなかできないわけですから、公民館が幼児だけではなく小学生、中学生ぐらいまで縦の年齢層の活動を展開していくことが必要だと思うんです。

奥田 松林会館ではあったのではないですか。子どもフェスティバルとかわんぱく教室みたいのが。今も続いている？。中学生や高校生になったりしても、たまに顔を出したりするというのが。

秋山 鳥居さんが縦で群れるように仕掛けをすると、「仕掛け」という言葉を使いましたよね。私は、公民館はもっと仕掛人になっていいんではないかと思う。というのは、学習というのは学習者が自らやるものなんですけど、少なくとも公的な社会教育という場面で見ると、教育として予算を組んで、事業をやる以上は必ずそこに学習効果なんていうとおかしいですが、そこに学校なら教育目標があるわけですが、公民館の事業においても事業目標のような、一つ一つの講座の中に講座目標が仕込まれていてそれを職員が目指して、目標に掲げながらやっていく。仕掛けるということはなにかということをお頭に置いて仕掛けていくというような所がないと。そういう意味では、公的に保障されている所で事業を組むんだから、目標をもった、良い意味では仕込まれたというような事業を是非とも組んでいってもらいたいと思うんです。何が今かけていて、何が今大事なのかということをお頭に置きながら。「仕組む」という言葉は適当ではないかもしれないが。

奥田 先程いいましたが、実行委員会というのは完全に仕掛けてやっていますよね。

秋山 学校教育の中ではありますよね。娘も学校で実行委員会にドブプリ浸かってましたけど、あの感動は忘れられないといいますもの。他の所では経験できなかった感動だと。人間と人間が繋がった時、感動を実感できるような場に公民館がなっていかなければ先細りになってしまう。

田中 人と人との出会いや喜びがある場というのはそんなにたくさんないですよ。例えば、学校の仲間といっても競争相手だったりしますよね。

奥田 基本的にそうですから。

田中 競争ではないものを目指そうと学校の先生が思っても、なかなかそれが出来ない。世の中からはやはり競争を求められますよね。

奥田 話がとんでしまうんですが、学校週5日制というので、隔週休みにしたでしょう。そうすると、実行委員会なんていうのはやってられないんです。なぜかといえば、そういう時間を全部切り詰めていって、授業だけが大事になっていくんですよ。今の教育課程審議会というのがどんな結論を出すかという事をハラハラしながら見ているんです。5日間にするんであれば、全体の授業を減らさなければ話にならないのです。

川辺 話は違いますが、職員の松坂さんが白梅分館にいた時、公民館のことを話そうよということがあったんですが、もう1回見直すのも良いと思うんです。先程の幼児教育でも公民館のすぐ側に公園があるし、林もあるんだし、色々そういう中で経験を積んだ人もいますので、地域の人に協力してもらおうとかすれば、2世代での交流もできるし、また、建物だけの中で学習するのではなくて、福生の自然をいかしていくような学習の仕方もあると思うんですね。

奥田 子どもたちの場合特に、児童館と公民館との連携なんていうとお役所的なんですけど、少なくとも児童館で今何をやっていて、どんな子供たちがどのくらい集まっているのかということが公民館の職員に理解されているんでしょうか。福

生の学童保育とか保育園はどうなっているんだろうかということ、公民館の保育の問題、公民館の少年事業の問題との関係の中で考えていかなければだめだと思うんですよ。向こうは自分達の専門領域をがっちりやればいいわけですから、公民館がどうしているんだろうとは発想してこないと思う。公民館側は、福生全体の子どもたちが今どうしているんだろうという発想の中で公民館をどうするのかを見てほしいですね。そこらあたりが、公民館の特徴ですし、公民館職員の力量だと思う。

川辺 少し枠を広げるといふか、外すといふか。つい最近、福祉センターで手話通訳の初級講座をやったんです。27名参加しているんです。40代ぐらいが



中心ですか。若い20代の人も参加してました。女性が多いですけど。交通の便が不便なのに大勢参加したんですよ。もし、ここでやったり、松林でやったら参加者がもっと出て来ると思うんですね。そうすると、福祉の活動を公民館と結び付けられるし。同じように、手話通訳だけではなく、ボランティア活動についても勉強していくように、せっきやく拠点があるんですから上手いかにしていく。そのためには、公民館の枠を取り払うのがいかに、よくわかりませんが、これからはそうしていかないと、やっていけないのではないかなと思うんですよ。

秋山 大変なことだけど、それをやると随分現状がわかりますよね。

田中 子どもたちも異年齢の関係が必要のように、若いお母さんたちも異年齢のお付き合いが必要ですね。お年寄りの知恵っていうのまでいなくても、ちょっとした知恵も力として持ってなかったり、発想がないんですよ。公民館が異年

齡集団を大事に育てて行くということも必要だと思うんですね。

秋山 言葉尻を取るようで申し訳ないんですが、枠を突破らうというわけが分からなくなってしまうということがよくあるので、枠を突破らうというよりも、公民館は公民館の独自性というものを持ちながら、だけでも奥田先生が言ったように、視野を広げてどういう形でこちらの分野でやっていることと繋がれるのかということを探っていく。佐々木さんもおっしゃったように、どういう所で繋がっていけるかというのを探っていく、どういう所で活動できるのかを探っていくのが必要ですよ。

川辺 それが職員の仕事ですよ。

秋山 やりがいがあって、職員はいきいきしてきますよ。

田中 この間、学童保育の話をちょっと聞いたんですけど、学童に来る子というのは小学校1年から3年生ぐらいまでですよ。その子供たちがすでに、おやつを食べるのにそれぞれのお皿を持って、一人ずつ食べているんですって。おやつってというのは丸くなって一緒に食べるっていうのが常識というか、イメージでしたよね。今それが、なかなか強制的にしないとできない時代なんです。私も今日、電車に乗ったら、高校生同士が話をしているんですね。一人の子は、ずーっと漫画を読んでいるんです。それで生返事をしていて、一人の子は一生懸命語りかけてるんです。そして、今度はその漫画を持って、片っぱが一生懸命読んで、もう片方は自分の気の向くまま話をしている。何か、すごく奇妙なんだけど、それでも一緒に学校にいくんだなと思いました。それがすでに、学童のおやつあたりからある。同じことをしているように見えるけれど、気持ちはバラバラなんです。よく見るとね。だから、同じように、ドロコをこねている、一緒にしているのが楽しいからこねているのではなくて、個々それぞれで、ただこ

ねている行為が一緒。それを聞くと、ちょっと肌寒い。

秋山 でもね、一緒にこねているのが楽しいからこねている現状と、今いったもう一方の個々にこねているだけの現状と、中身が違うということを見抜けないと駄目なのよね。現象的には同じですよ。

田中 見た目はね。

秋山 その辺の違いを見て取るというか。

田中 公民館で、もしかしたら時代の流れからは逆行している所があるかも知れませんね。例えば今、競争が大事だといっている社会のなかで競争をやめましようとか。

鳥居 さいわい、バブルもはじけたし。

秋山 はじけてみたら、公民館がやはり公的に保障されている事の大きさが逆にわかりますね。

鳥居 それから、競争とお金だけでできてたのが、それだけではないよというふうに少しは目が向いてきているんじゃないかと思う。

川辺 ある意味でいえばこれからは公民館は上り坂。

奥田 僕は、冒頭の最初の10年は上り坂、後の10年は下り坂というのがどうしても気になる。僕はそうでないという気がする。

秋山 それは、現状をみていないからです。福生の現状をみていないからです。

奥田 そうかな。最初の10年というのは、公民館が0から1になって10年が始まるわけですけど、さらに3館に伸びていくわけですよ。そして、公民館のつどいもやり始めるし、何でも新しいこと新しいことをやってきた10年ですよ。だけどその次の10年というのは、今までやってきたことを積み重ねているわけです。

秋山 本当は積み重ねながら、ある意味では確認していかななくてはならないんですよ。人間て、積み重なっていくうちに「ここまでできたからいいか」みたいな安心感なのか、「このままやって

いけばいくだらう」というみたいな部分が出てきている時期ではないかな。

奥田 表面的な変化というのは確かにないと思うんですよ。最初の10年というのは、全てが表面的な変化でしたから。その後の10年というのは必ずしも表面的な変化がないから停滞しているというように映るといふ面がある。

秋山 まず、表面的な変化があるんです。私はその辺を凄く感じています。

奥田 僕は行ってないからわからないのかもしれない。

秋山 そうかもしれませんよ。

田中 最初の10年というのは奥田先生がおっしゃるように表面的な、新しいもの新しいものとお拓してきたパワーもあったかもしれないけど、お金もありましたよね。でもこれからは、問われる10年になると思うんですね。

奥田 これから先はそうですね。後の10年が下降線だったというのがどうも。

秋山 下降線だったというか、でも、私にはどうもそうと…。

川辺 こんな風に表現してみたらどうかな。最初の10年ていうのは、希望があったり、情熱があったり。

秋山 押しつけるつもりはないから、皆さん。

川辺 でも、ある面今は活気ないですよ。

秋山 だからそういう意味でいってるんです。さっきずっと述べてきたようなことが、すごくかけているんですよ。そういうことという職員の方は怒るかもしれませんが、事実、かけてきているそういう現状。どっちの責任とかということではないですけど、相互関係の中のことですから。でもやはり、職員は職員として配置されているんですよ。そこが、市民と違うんですよ。そこは大きいと思いますよ。仕事としているんです。その所をもう1回、私はやはり、そういう意味では非常に活気がなくなってきていると思うんです。

川辺 秋山さんがいっているのは、希望がなくてずっと来ているということではないんだよね。

秋山 そうそう。もう一度こうね。こういうふうに上り坂ね。

奥田 もう一つ、欲しいなと思うデータがあるんですが、それは中身に関するデータで、講座の



内容がこの10年どんな変化あったんだろうということ。それとの関連で2つあるんですけれども、僕は内容別に公民館の事業がどういう風に変遷してき

たかをなぜ知りたいかということの一番大きい理由は、今公民館の学級講座で福祉のことを勉強する講座をどのくらい組んでいるのかということが知りたい。福祉センターができたから福祉のことは向こうにまかせておけばいい、公民館の方では福祉のことはやらないでもいいというような感覚がないのかしらというね。さっきも手話の話をなされたけれど、今、例えば介護保険の勉強をなぜ公民館が主催事業としてやらないのかと思うんですよ。こんなに問題になってるのに。そして、もう3年ほど前に全部の市町村がゴールドプランをつくることを強制されたわけでしょう。つくっているわけですよ。それを市民が、勉強する講座がなぜないのか。あるのかもしれない、僕は来てないから。そういう事をやらないといけないんじゃないかと思ってるんです。介護保健の勉強を、今法律として通ったばかりの法案がどんな構造になって、どんな事になりそうなのかということさえ、勉強してないわけでしょう、私たち市民は。そういう事はやはり、公民館でなかったらできないんじゃないか。福祉の世界ではいま目の前のお年寄りをどうするかとか、目の前の子どもたちをどうするかというね、その活動でいっぱいなわけです。だから公民館ではその福祉がやっていない、

そういう事をやるべきではないかなというのが一つ。

もう一つはね、福生でどうして公民館20周年記念事業を市民が実行委員会を組んでやろうという事にならなかったんだろう。僕は、20周年記念誌を作るので座談会をと言われた時に、が一んとびっくりしたわけ。そうだ、20年だ。20周年記念の行事をなぜ市民がやろうとしないんだろう。不思議でしょうがなかったし、自分自身が気付かなかった、それほど公民館から離れてたんだということもあってね。これからでもいいと思うんですよ。松林は来年が20周年ですから。白梅は再来年の次が20周年ですから。そうすると、この座談会をきっかけにして20周年を3年間ぐらいかけてやるということが市民の中から声が出て当然なんじゃないかなっていうふうに僕は思ったんです。ところで、東村山市が公民館11周年記念事業というのをやってるんですよ。おもしろいでしょう。11周年記念事業。なぜ、11周年なのか。10周年が来て気が付いたんですって、市民が。だからそこから準備したら11週年記念事業になった。公民館で、そういう融通がある所でいいと思うんですよ。だから、これからやはり、市民も実行委員会をつくって20周年記念事業をやるべきではないですかね。

秋山 先生だけではなくて、私なんかも今年の公民館のつどいの頃になって20周年なんだって言われて、エッていうような感じで、それぐらいのんきな市民で、ある意味では申し訳ないんですけど、もう少しこう働きかけがあっても良かったんじゃないかと思う。20周年記念の事もなんかふってわいたみたいだから、公民館のつどいと一緒に20周年をやるっていきなり言われて。

奥田 そういう点ではこの10年、まわりから盛り上がってくるというような雰囲気がないと言う意味で下降線なのかもしれない。

秋山 やっぱり、ちょっと元気がないというか。

なぜ、今ね、市民の中から声が上がらなかったっていうのは、くしくもそういう状態なんではないかなって私は思いますね。だから、東大和なんかはやっぱり、そこで気付いた時からやりだして11周年になったという話を。まあ、そういう風になれば、なったであれですけど。

奥田 東大和は3年かけてやっています。Go Go 20という記念行事を1年間やってその前の年の1年間と後の1年間前夜祭と後夜祭を1年づつ全部で3年、実際には1年の前半、後半なんですけどね。それはビデオに残ってますから、2本の。だから、そういう意味では東大和はその頃元気だった。

秋山 こういうのも、少し前の年ぐらいから市民に声がけをしておいて、そして少しづつこういう意識が出てくるっていう感じですよ。公民館のつどいの頃にいきなりいわれて、だから20周年をつどいの中でやると、急遽その方向でやってしまいたいな。

奥田 だけどやっぱり、職員に対して20周年だからと1、2年前からいう市民が一人くらいいたって良かったと思う。

秋山 それは奥田先生ぐらいの人だって気がつかないのだから…。

奥田 そう、反省しています。実は個人的事情なんですけど4年間社会教育から全く離れているんです。今日なども、本当は出てくるのに気持ち的にはすごく躊躇したんですけど、こういう時でない公民館の話ができないもんですから、もう声をかけていただいて大喜びで、今日は公民館の日だなんて思って。

鳥居 さっきの奥田先生が介護保険とはどんなものか公民館で学ぶ機会を設けてもいいのではという事が出てきましたけど、それは現代的というか、今日的というか大変な問題なんだからね、もっと取り上げていいんじゃないか。というのは、去年から環境問題を考える国際的な会議が京都であっ



たでしょ。ああいう事についても、二酸化炭素が増えたらどうなんだというのが新聞とか雑誌とかいろんな所に出てるけど、それをもうちょっと自分達が知りたいことを知ろうというのはやはり公民館の講座でないと。

秋山 この間の私たちがした東京都公民館研究大会の分科会の中で、あれは国分寺でしたっけ、京都会議の前に環境問題をテーマにした講座を開いているところがあるんですよ。

鳥居 やっぱりあれは、前のほうが盛り上がっているというか、ジャーナリストも取り上げてるわけですよ。本当はそういった時期に講座なんかやると人も集まる。

田中 今、保育付きの講座では環境をテーマにしたのをやってるんですよ。地道に、家の周りを調査したりとかしてます。講師の先生は京都会議にも行ってらっしゃるし、ドイツなんかにもそういう関係で行ってらっしゃる方なんです。

鳥居 知らせを良くみてなかったな。

秋山 それはアピールの仕方の問題なんじゃない。それは「環境問題について考えましょう」と出るのか、今いったように、流れとしては同じことをやるにしても、「地球温暖化防止京都会議に対応して考えてみましょう」と出るのかね。ちょっとその辺の出し方。

鳥居 僕も常々思ってるんだけど、公民館はまずね、人が来なくては何も始まらないと思う。大勢人がこれることを考えなきゃ。

奥田 やっぱり、人が来るきっかけは講座なんですよ。公民館に人が来るきっかけの第一は、新たに初めて市民が公民館に足を運ぶというのは講座なんですよ。そして、こんなサークル活動をやっているところがあるのを知ってサークルに入ってくるということになる。サークル活動をやっている人が場所がなくて公民館に来て初めて公民館と出会うというのももちろんありますけど、やっぱり一番の、きっかけは学級講座ですね。

秋山 先程奥田先生が言ってらしたことで、本当は館長さんが答えるのがいいのかもしれないですが、私はこの10年で大きく公民館の中で力を出したなと思うのは、やっぱり障害者の学級が開設されてそれが定着したっていうのは凄く大きいなと思うんでね。

奥田 これはいつからですか。障害者の。

司会 昭和60年です。

奥田 そうすると前の10年の終りのところ。

秋山 その間に国際障害者年がありましたよね。そこでもう一つ世界的にも障害者の位置付けというのがはっきりしてきたっていうんですか。私達の目にも耳にもはっきりしてきたっていうことでもありますよね。それから私にとっては、公民館がこの10年で大きいのは女性問題。やっぱりあの婦人の10年というのがあって、そのへんを境にして私なんか随分勉強しました。福生の公民館だけではなくて、三多摩地区の公民館の中の女性問題を考える人達の交流会なんか頻りに開かれたりなんかした。女性問題も、今や公民館が当然取り上げる問題として、公民館事業の課題として定着した10年と思います。その2つだけはかなり大きいこととして私はとらえている。それぐらい、公民館がやっぱりタイムリーに物事をつかんでやっていくことの大ききみみたいな、その実りっていうのはやっぱり大きいだろうなって思う。

奥田 障害者青年学級、女性問題という大きな成果があった。それと音楽のこと。第九やオペラが市民の手で出来たこともとても重要なことだと思いますね。この10年で3つでした。他にないですか。

秋山 公運審は頑張りましたよ。

川辺 この10年で答申を出しているわけでしょ。あれは大きいですよ。それはやっぱりあの。

奥田 それはその「公運審だより」を含めて。

秋山 公運審自体が、ちゃんと審議する場になったっていうか。それは全然違いますね。私ね、

初めて自分が何年になったのか忘れてしまいましたけど、これをみたらね、59年なんですよ。59年の頃はね、まだ審議するっていう公運審ではなかったですね。私が入りたての頃は。

奥田 まだ、定例開催じゃなかったでしょう。

秋山 そうです。4回ぐらいです、年。だから、そこからみればこの公運審の10年の変化は凄く大きい。公運審自身がその中で自ら学習するっていうことも定着してきて、いま新しい委員さんですけど、新しい委員さんなりの努力をいまされてるみたいですしね。そういう意味では凄く変わりましたよ。

奥田 これ、福生市公運審が東京都公民館大会に提出した「公民館の本質を危うくする地方分権推進委員会『第二次勧告』に反対の呼びかけ」なんか見事です。僕はこの座談会か何かの最後に是非これを収録しておいてほしいですよ。

秋山 そうですね。

奥田 やっぱり、ちゃんと都公連大会に出かけていって、公運審の名前でアピールした。

秋山 非常に大変なことをした。

田中 それが打上花火みたいにならないように。福生市民にとって、利用者にとっての力になって行くようにしていかないと。もちろん市民も力を付けていかなきゃいけないと思うし、責任も大きいですよ。

奥田 これね、花火だけではあがりませんよ。他に何も活動していない公運審が、これだけやるなんてこと有り得ないですよ。

田中 そうですね。福生の公運審の活動が市民と凄く距離があるっていうのも困ると思うし、公運審だけが独自にやっていけば良いことでもないし。

秋山 今回、公運審は利用者交流会、利用者連絡会にも同じようなかたちで働きかけをしてるんでね。

田中 それが、こうきちんと市民の人たちに

とって学習になっていかないと本当の力にならないですよ。

奥田 僕は今のね、利用者連絡会もあげるべきではないでしょうか。例えば、本館はいつできたんですか。一番早かったのはどこなんですか。最も、公運審委員に、利用者の代表として一番最初に出したのは、松林と白梅でしょ。

秋山 松林は、私の前の人もそういう形で選ばれて出てきた。

奥田 橋本さんですか。

秋山 そうです。橋本増さんですね。

川辺 その頃白梅は佐久間登世子さんだったかな。

奥田 そして本館が出すようになって、やがて本館が二人になったんですよ。

秋山 二人になったのは割に最近になってからですよ。

奥田 本館だってこの10年でしょ。

秋山 まずPTAの代表がPTAの任期と公運審の任期とがなかなか合わなくて任期途中で交替が多く、委員の委嘱期間を満了するのが難しいなどという理由から無くなりましたよね。そして青連協が選出母体が解散したことにより無くなりましたよね。そのところで本館から出る利用者の方が増員になるっていうかたちになりましたよね。

奥田 僕は、公運審が社会教育委員会から独立してからずっと去年までやってたんですね。その時に感じたことは、利用者の、松林や白梅の利用者の代表が入って公運審の雰囲気ガラッと変わりましたね。そして、本館が出て決定打でした。そしてその本館が二人出すようになって、これで本当の決定打でした。

秋山 二人出るようになったのはここ3期ぐらい。

鳥居 杉山行男さんなんかでてたとき。

奥田 杉山さんも最初は一人だと思っただけです。

司会 まだ、2期めぐらいです。

秋山　そうですね。二人出るようになって。だからやっぱり、今までは公民館を知らない人が多かったんですよ。公民館は使っていない、わかんないけど来てるっていうような人が結構多かったけども、実際に公民館を使っている代表が二人出るっていうことが大きかったということですね。

奥田　定例会にしたのも、公運審だよりを出したのも。

秋山　いい続けてきてなかなか実現しなかった。杉山さんが公運審に入った代からですよ。公運審だよりがやっと出るようになったのも。

奥田　それは本館の利用者交流会から代表が出るようになって、ということですね。そのところはちょっと調べてみる必要がありますよね。

鳥居　さっきさらっと、本館の利用者交流会のこと調べたら、平成6年からですね。会則までつくったのは。その前は、利用者ネットワークっていうのがあったんですね。定期的かな、集まりは持ってましたけど、準備段階ですね。

司会　先程から色々とお話を聞いていると、この10年公民館が元気だったのか元気じゃなかったのかという話に、こだわっているようですが、私としては、元気なところと元気じゃないところが差が出てきてしまったのかなという気がしております。本当は司会という立場からしますと、全部元気だよと言い切らなくちゃいけないんですけども、音楽関係は第九やオペラで本当に元気だった部分ではなかったかと思います。第九だけではなく、たまたまTAMAらいふ21でのオペラがあったり東京都の都市博覧会が中止の関係でミュージカルを福生でやらなくてはならなくなって、それも、やってしまったという、うまい時代にうまく御興があって、担いでしまったという、その中では、奥田先生もおっしゃってましたけど、市民会館という一つの建物があったお陰で公民館がそれを利用して一つ事業が展開できたっていう

のは確かな事実だと思います。この、お祭りというかたちがちょっと強かったものですから、お祭りは熱気が覚めてしまうとちょっと後の祭りというか、元気がなくなってしまうのかなと。それを公民館がこれから、そうならないように、今までと同じように作って行くよう努力しなくてはならないと思うのです。それから、元気な年齢と元気じゃない年齢はやっぱりあるんじゃないかなと。今日おいで下さっている方皆さん全員元気な年齢です。人と人の繋がりも豊かに持てる人達です。昔から公民館を利用されていて、公民館の良いところも悪いところもご存じのかたがたです。元気ではない年齢といいますのは、先程田中さんからもお話がでてましたけど学習知識はもうたくさんあるんだ、だから、公民館にいて積極的に勉強なんてしなくてもという人達、元気が無いというより、公民館に興味が無いというのでしょうか、そういう人達がいるということでしょうか。そういう人が増えてしまったので結果的に公民館に元気な若い人たちが来なくなったということでしょうか。

奥田　あるのかな。

司会　それはただ、そういう一つの。

田中　ある保育の事業に参加したお母さんが、講座内容に期待して参加してみたら私の知ってる内容ばかりだった。だけれども、子どもを預けたら、子どもがいきいきと変わっていった。子どもをみてて自分の子育て観も変わった。嬉しくって、また公民館に来たいと言う人もいるわけです。

司会　その辺の年齢の人がきてくれるようになるとますます公民館は元気になりますね。公民館を含めて、この10年は情報公開ですとか地方分権とかで色々行政機関の中が変わろうとしていますが、なかなか本質は、職員の意識は変わっていないのではないかなという気はします。ですから、先程からロビーの使い勝手がどうのこうのというときに、もうちょっと柔軟に対処しなければなら

ないのかなと、その辺もこの10年の反省のもとにして次の10年に伝えていかななくてはいけないのかなと思います。特にここで若い職員が随分大勢入ってきたわけですから、古い職員が若い職員に公民館というのがどういうことなのか、公民館はなぜ必要とするのかということのを正しく伝えていけるのかどうかというようなこともです。それは当然、講座の内容等にも反映されてくるんですけど。先程の話からしても知識の豊富な市民は多いんだと思うんですけど、では実際知恵があるのかどうか。その知恵を学べる、学ぶことによって公民館がもっと魅力的になっていくのかなと思います。その知恵はどういう方から、さずかっていくのかなと。川辺さんもおっしゃってましたけど、お年寄りから若い人が学ぶと、若い人からお年寄りが学ぶ、そういう場所をつくっていかなくてはならないのかなと。福祉センターで行う介護講座は、実際に自分達が必要に迫られて学ばなくてはならないことなんですけども、公民館としてはそれ以前に介護を受ける立場になったときに介護してくれる仲間を地域を作っていたい、実際に介護して貰えなくても心の支えとしての仲間づくりをでき

ればよい。例えば、第九というのは1000万ぐらいのお金がかかるわけですが、第九を一つ作り上げてくださった人々の連帯っていうのは、例えば、大震災がおきたときですとか、歌った仲間が病気の時ですとか、色々なときに、いつかこの第九で培った連帯、公民館の事業の中で培った繋がりが、何らかの形で非常に役に立つのだと思います。それこそただ文化をつくるだけではないという、公民館の役割が見えてくるのではないかと思います。福祉を充実することも大切ですが、まずは公民館で、市民がいかにか仲間作りができるかが非常に大切なんだなと思います。それは、今までもそうだったんですが、これからの公民館に与えられた大切な仕事であり、このことはこれからの福生の未来を大きく左右することになるのではないかと考えます。そのためには公民館はもっともっと仕掛けをして、福生の6万市民が全て顔見知りになれるような公民館の事業の仕掛けを作っていければいいなという気がしております。

長時間にわたりまして、楽しく貴重なお話をお聞かせいただいたわけですが、今日は本当にありがとうございました。



## 2. これからの公民館

### 公民館本館の現状とこれからの備えについて

公民館開館20年を経た現在、福生市生涯学習審議会の答申が平成7年8月に出され、次いで平成9年3月には生涯学習推進計画の策定となっていました。この経緯にあって、当市も現代の社会変化の影響を受け、市民生活上の各種課題が発生してきているとともに、市民の価値観やライフスタイルも多様化してきています。また、従来から提起されている都市化・核家族化・小子化による地域の新たなコミュニティの形成は、むしろこれからの生涯学習時代のひとつの大きな課題であると考えられます。

当市公民館は、市民会館との複合施設として開館して以来、文化ホール施設機能と教育機関としての両機能の整備をすすめてきました。ホール施設についてはその利用の拡大や自主事業において芸術・文化・娯楽の鑑賞の機会とともに市民参加型の事業の開発につとめ、広域性をもった施設機能の整備を図ってきています。公民館は幼児から高齢者までの学習機会の整備や市民利用者の学習文化活動における自主性（各種連絡会）・自治の高まりへの支援と現代的生活課題の学習機会の整備等を図ってきました。また、市の現状においては各種施策の推進のうち、地域福祉の推進が大きく掲げられてきています。

こうした中、市民会館・公民館（以下「会館」）は平成6年7月開館の茶室“福庵”の管理運営業務を所管することになりました。また特に、平成9年度の動向においては、会館に隣接する「福祉会館」が、新たな福祉の拠点“福生市福祉センター”のオープンによりその組織機能のすべてが移転したことに伴い、「地域会館」へ措置換えとなり、今後の改良工事により新たに可動することになります。これについての管理運営は、会館が

所管するものとなってきました。

地域会館は福生市社会教育計画により、地域コミュニティの形成と地域福祉の増進を目標として、小学校区に1館の配置（全7館）がされており、社会教育部の所管となっています。地域会館設置以来21年、公民館や図書館及び児童館との複合機能のものと、単独の地域会館（学童保育はすべての地域会館に配置）などの種別は異なりますが、各々に町内会関係や学習文化活動及び一部公民館事業等で地域会館を使用するようになってきています。しかし本来目標に沿った活用はなお今後の課題といえます。

このように会館は公民館（教育機関）、市民会館・茶室（文化施設）、地域会館（自治・地域福祉増進）の4施設3機能を所管することになるので、これらの施設の並列管理に留まらず、総合文化施策としての運営整備を図る必要があるといえましょう。つまり個々の施設の性格役割を明確にし、その固有の機能を発揮しつつ、当該各機能を有機的に統合した運営方針の形成です。この施策は、多様な文化諸活動（市民会館、茶室）及びコミュニティ形成による地域福祉の増進に対応しつつ、教育機関としての公民館の機能を果していくものとなりましょう。その究極は市民自治の形成にあると考えます。

戦後日本の国土の荒廃の中、郷土の復興・創造及び民主主義社会の形成にむけ、公民館はそれへの総合的役割を担って設置されましたが、社会の進展の中、機能分化がすすみ、教育機関としての機能を核として現在まで整備されてきました。今後の社会変化に対応して、まちの文化創造、地域福祉の推進や市民自治にかかわり、公民館本来の総合的視野に立って教育機関としての役割を果たせるようこれに備え、研究を深めていく必要があると考えます。

## 市民が創った公民館を さらに発展させてほしい

和光大学教授

小林 文人



このたび福生市公民館20周年記念誌が編まれるという。まずはお祝いを申しあげたい。そういえば、公民館開館10周年記念誌（『公民館10年の歩み』1988年）もなかなかの力作だった。福生市公民館はまた公民館には珍しく『公民館紀要』を毎年発行してきている。しっかりした取り組みだ。私のつたない話の記録もそのなかに紹介していただいたことがあった（1981年度「公民館と市民の活動」）。

この20周年記念誌に一文を収録していただくのは光栄なことである。以下、私なりの回想と今後に期待していくつかの提言を試みることにする。

### なにもなかった時代からの出発—いくつかの回想

私がはじめて福生の社会教育と出会ったのは、たしか1967年あたり、もちろんまだ公民館はなかった。当時の社会教育主事・野沢久人さんから声がかかって「婦人会」かなにかの研修会に出席した。ほぼ30年前のこと、野沢さんも私もまだ若かった。

場所は駅の南側の会館（集会所）、固有の社会教育施設ではなかったと思う。駅の北側は基地のまち、社会教育や文化の施設はなにもない、ただ社会教育の職員が孤独にひたすら頑張っている、あるのはただ心意気だけ、そんな記憶が痛切にのこっている。

しかしそれから福生の社会教育・行政は、飛躍

的な躍進をとげる。人口急増を背景としつつ、福祉社会館（1970年、2階の会議室が当初は固有の社会教育的空間）、市民体育館（1973年）、そして市民会館・公民館の開館（1977年）、さらに図書館・博物館（郷土資料室）や松林分館（1979年）、白梅分館（1980年）などが設置されてきた。この間には当然、施設運営を担う職員体制の増強、社会教育行政機構の拡充が行われ、また社会教育委員会会議も重要な構想（基本構想、1975年など）を提起してきた。

この経過はまさに1970年代の「飛躍」といってよい。それまで「なにもない」状況があっただけに、その飛躍がことさら鮮明である。自治体社会教育にとって、こんな10年はおそらく二度とないのではないだろうか。

どうしてこういう10年の奇跡的な飛躍が可能だったのだろうか。福生という自治体社会教育のいわばルネッサンス、貴重な歴史としてみずから分析してほしいところである。

当時、三多摩の各自治体では、多かれ少なかれ似たような展開がみられた。それまで夢にみた図書館が新しく姿をあらわす、あるいは公民館が設置される、などいろんな動きがあった。しかし福生のような画期的な短期の躍進はあまり例がないだろう。

公民館については70年代の新しい状況を背景として、東京都「新しい公民館像をめざして」（1973～74年、三多摩テーゼ）が作成された。私もこれに参加した。そしてこのテーゼがまた70年代後半の新しい状況をつき動かす契機となった。福生でもこのテーゼがよく読まれ、福生の「公民館像」の形成に少なからぬ役割を果たしたはずである。

新しい公民館の実現には、自治体理事者の理解と認識が、また財政上必要な措置が講じられなければならない。しかし自治体理事者の政策だけで、いい公民館が出来上がるものではない。ハードの条件にソフトの内容が結びついていく必要がある。

仏に魂をふきこむ市民の思いと職員集団の力量が相伴わなければならない。

福生の場合、自治体側と市民のエネルギーと職員集団の役割、この三つがうまく結合したと言えるのではないだろうか。その結びつきが「70年代の飛躍」を創出したのだらう。自治体の公民館政策と、その政策を求めた市民と職員の専門的力量的各要因の調和的な結びつきが、新しい公民館を実現していく力となった。

もちろん理想通りに、理念そのままに、事態は動いてきたわけではない。きっと内部にはさまざまな問題点もあったに違いない。公民館の歴史が20年を経過した段階で、あらためてそれらの具体的な展開を分析的に振りかえってみたいものである。

#### 原点としのて「公民館づくり」住民運動

福生市公民館の設立にあたっては、なかでも「公民館を創る市民の会」が重要な役割を果たしてきた。この時期の各地の公民館・図書館づくり住民運動の多くが女性を主要な担い手としていたのに比して、となりの昭島とともに福生の場合は、青年たちがその中心にいた。地域の公民館づくりに若者たちが動いたのである。夜おそくまで学習会に参加したことを思い出すが、村野雅義くんなどの若々しい笑い声と、ときに理論的なやりとりが心地よく耳にのこっている。

その歴史的な系譜としては、かつての青年団運動や、それが姿を消してからの若者サークルの活動がある。公民館づくりの青年たちの取り組み、その背景には福生の青年運動の土壌のようなものがあつたと言えるだろう。それに奥田泰弘氏など研究者との出会いがあり、かなりの理論的な水準で公民館像が追求された。「公民館を創る市民の会」の活動の軌跡のなかに、その成果を残されている。施設・設備の物的条件整備だけでなく、あ

るべき公民館像から導きだされる「職員配置および運営」のあり方までが鋭く追求された。その典型がいわゆる「10項目要求」であった（1976年）。

公民館の開館の1年前、「市民の会」は「福生市公民館の“職員配置および運営”に関する要望」（10項目）を提出している。これほどの理論性をもった市民「要望」はそう多くない。この記録は、福生市公民館『10年のあゆみ』に収録されてさすがであるが、全国的規模でも、すぐれた実践・運動事例を一冊にあつめた『社会教育ハンドブック』（エイデル研究所、1979年）に紹介され、多くの人たちに読みつがれた。

公民館がいわば上から「施し設け」られたのではなく、市民が自らのものとして求め創りだしたこと、その中心に若者たちがいたこと、その運動は高い理論性で支えられていたこと、などをいまあらためて思い起こしておきたい。そして、市民が求めた要求に自治体側は可能の範囲で対応し、それを支えつなぐ職業集団の役割も加わって、福生の公民館はいい船出をしたのである。それから20年経ったことになる。

#### 20年の歩みの検証を

日本の公民館は、創設時の寺中構想（文部省、1946年）を起点として出発した。福生の公民館は、それから約30年おくれて、しかし新しく市民が求めた公民館像の基礎として20年の歴史をきざんできた。そこには独自の「福生構想」とでもいうべきものの歩みがあると思う。文部省の初期構想に起点をもちつつ、また三多摩テーゼ等の影響も受けながら、福生市公民館としての独自の構想とその20年の展開があつたことになる。

いったい「福生構想」の特長は何であろうか。またこの20年が創りだしたもの（あるいは創りだせなかったもの）は何だろう。歴史を振りかえり、生涯学習時代と呼ばれる現時点に立って、公民館

の現在を検証してみる必要がある。それが今後の公民館の歩む方向と課題を明らかにすることにもなる。

検証の視点として、かつての「公民館を創る市民の会」の要望「10項目」をおいてみることも一つの方法であろう。

関連して、私なりに福生市公民館の独自性、その特長について、とくに次の7点をあげてみたい。

- (1) 「住民が創る」という視点、市民の要求・期待にこたえる事業編成、「住民参加」の運営・組織論、たとえば公民館運営審議会や公民館利用者連絡会の役割の重視など。
- (2) 子どもと若者にとって魅力的な公民館活動、野外・地域活動へのまなざし。
- (3) 住民の自主的な活動、サークル・団体・ボランティア等への積極的な援助・奨励。
- (4) 教育・学習にせまく限定されない文化・芸術・スポーツ活動の拡がり。
- (5) 社会的に不利な立場にある人々の学習・文化活動の機会保障、たとえば障害者、高齢者、外国籍住民への公民館サービスの拡大。
- (6) 公民館の地域（分館）配置の重視。各種関連施設との連携協力。
- (7) 職員集団の力量と情熱。

これらは単なる理念をならべたものではない。福生市公民館の20年は、その創設（あるいはそれ以前から）の時点から、このような姿勢を大事にして歩んできた、あるいは挑戦してきた、そのように私には思われるのである。私なりの公民館「福生構想」への想いでもある。

いま生涯学習時代だからこそ、地域に立脚する公民館の役割が重要であり、「住民が想る」視点が不可欠ではないだろうか。その意味で福生市公民館20年の歩みはかけがえのない実証であり、その歴史を検証しつつ、公民館のさらに新たな可能性を画きだしてほしい。